



教員特別研究（先進的研究）成果報告書 | 配分研究費：325千円（令和2年度～令和4年度（2年延長））

「グローバル・ヒストリー」からみた戦前期農産物貿易の研究

目的・概要

グローバル・ヒストリーと地域史を架橋するものとして、日米牛肉・オレンジ交渉でも政治問題化した柑橘や牛肉を選んだ。その理由は、世界で生産・消費される商品であるとともに地域性も有するからである。日本の柑橘といえば温州ミカンだし米国ではオレンジである。牛肉も日本では霜降りが、豪州では赤身肉が好まれる。こうした地域性が戦前の世界市場でいかに形成され、戦後どう推移したのか、明らかにしたい。そしてグローバル性とローカル性から「グローバル・ヒストリー」という新視角も得たい。

期間

令和2年4月1日～令和3年3月31日、令和3年4月1日～令和5年3月31日

研究担当者

文化政策学部 文化政策学科 教授 四方田 雅史（研究代表者）

スケジュール

令和2年4月～5年1月

令和3年3月

令和5年2月

コロナ禍のため、国内において柑橘・牛肉に関する資料調査・フィールドワークなどを行う
論文「柑橘貿易からみた環太平洋圏―静岡県を事例として」として刊行
台湾大学（旧台北帝国大学）図書館での田中長三郎文庫などの柑橘・牛肉関連の調査

研究成果

柑橘は中国南部～インドが原産地とされるが、そこから東回りで日本に達し、西回りでアラブ世界・欧州を経て新大陸まで達した。その際東アジアでは生果を消費する文化が定着し、新大陸ではジュースとして消費する文化に進化した。東アジアでは、手間をかけ糖度の高い柑橘を目指す柑橘園芸が優れたものとされ、国内でも農業試験場などローカルな単位での品種改良が試みられていく。そのため、環太平洋圏の対岸で異なる柑橘文化が対峙することになった。

対して牛肉については東アジアでも多様であった。特に中国では、遊牧民の赤身肉の世界、河北・山東など霜降りの得られやすい農耕牛の世界などに分かれる。日本・朝鮮はそのうち農耕牛の地域に属し、その共通性によって戦前に貿易が活発になった事例が青島牛であった。世界規模で見れば遊牧民の牛肉世界が欧州に影響を与え、英国市場に特化していた豪州は赤身肉を嗜好する地域に、対し米国は独立後英国から背を向けトウモロコシを飼料とする（日本ほどではないが）霜降り牛肉生産を志向する地域に変化した。結果として米・豪の輸入圧力に対し、日本の畜産業各産地は黒毛和種を中心として霜降りを米国以上に進めることにより対応した。

このようにグローバルな市場とローカルな対応とが互いに影響しあいながら展開されてきたことが分かる。むしろグローバル化の進展によりローカルな要素を補強しながら進んでいったことが、両農畜産物から読み取れる。

今後の研究成果の還元方法

静岡県立大学グローバル地域センターで報告し、「柑橘貿易からみた環太平洋圏―静岡県を事例として」（『21世紀アジアのグローバル・ネットワーク構築と静岡県の新たな役割』2021年）として既に発表した。中央研究院台湾史研究所と日本経済思想史学会との国際学術交流会議（2023年8月）で本成果の一部を「戦前期東アジア柑橘貿易にみる台湾の位置」として報告した。それらを拡張する形で研究成果の原稿を既に執筆している。その一部を投稿していくか、まとめて本として上梓するか、検討中である。